

内山節著

『子どもたちの時間——山村から教育をみる』

岩波書店、230頁、1996年

持田良和（龍谷大学）

近年、日本における〈子ども〉もしくは子どもたちの生活にかかわる議論の多くは、「遊び」か「勉強」を中心に語られてきた。〈子ども〉の仕事あるいは「労働」の側面について語られるときは、〈子ども〉の存在そのものについての意味よりも、その行為が子どもたちにもたらす影響に言及されることがほとんどであった。すなわち、一方では、労働や仕事が、子どもたちの成長、なかんずく知力や器用さに好影響を与えるというような議論であり、他方では子どもたちが苛酷な労働に追いやられるなかで、順調な成長が阻害されるというような議論である。

ところが、内山は、子どもたちの〈生〉にとって仕事や労働が持つ意味を、「時間」の流れを媒介として、正面からとらえようと試みている。内山は、初期の著作より一貫して、人間の存在にとっての労働の意味について考えてきた論者であるが、本書においては、その方法論を〈子ども〉にも適用しようとしたともいえよう。

内山はまず、フランスの農村で見かけた責任ある仕事を任された子どもたちの姿から書き起こしている。ホテルの管理係やボーイの仕事を任せられ、てきぱきと働く姿のなかに自分の仕事を持つことについての子どもたちの誇り、あるいはかけがえのない村の重要な構成員として子どもたちの価値を見いだしたというのである。

このフランスの子どもたちの姿からひるがえって日本の子どもたちの生活における仕事ないし労働のありようを、「時間」を切り口としてみると、特徴的な姿が浮かび上がってくるという。やや煩瑣ではあるが、章と節の見出しを抜き出して見よう。現代社会と少年期の子ども〔幼年期から少年期への変換／子どもと循環する時間／変わりつづける現代社会／「無事な社会」のおわり／時代遅れになる恐怖／子どもたちの精神の風景／人生の経営計画をたてる子どもたち／孤独な時間の経営／子どもは大人の世界を模倣する〕・現代の時間と子どもたち〔村に時計がはいった／学校と時計／冬だけの代用教員／農民の時間／暮らしの継承／循環する自然をまもる／暮らしとともにある時間世界／テラーとフォードが発見した時間／個人のものになった時間／関係の中で創造される時間／時間を使い捨てる／現代の子どもたちが生きている時間世界〕・暮らしの知恵と学校の知識〔山村と学校教育／村に暮らす知恵・学校の知識／学校教育は山村離れをうながす／「郷土を愛そう」というスローガン／近代的な学問と村人の学問／自然と人間がともにある時空／個人と群集／個人の集合体としての学校・社会／村の暮らしへの回帰／おびえる精神〕・少年期の成長〔子どもたちが育つ精神の環境／個人と群集の使い分け／未来のための時間／時間世界を創造する〕

内山は、人間の存在を支える基本にあるものは「関係」であり、さまざまな「関係」のなかに存在している自己を自覚してはじめて、安心感を得ると指摘している。

ところが、この「関係」のなかの存在については、近代における社会の変化、すなわち自

分の存在する社会の全体が見通せないようになっていくなかで、自覚しにくくなってきているというのである。とりわけ村のなかで一つの役目を担って村の生活＝「循環系」の社会に加わることによって手にしていた、「村にとって必要な『小さな大人』としての、自分の存在の場所」を失ったというのである。時間を限られた「稼ぎ」としての労働が求められるなかで、子どもたちの時間は切り刻まれ、「学校」という時間的にも空間的にも、関係から区切られたなかで、時間を過ごすことが、存在への不安定さを生み出しているというのだ。

本書は「時間」という視点を切り口としながら関係性のなかの〈子ども〉と仕事を考えることで、たんなる懐古趣味ではない近代批判となり得ていると思われる。ただ内山の他の著作における整然とした批判あるいは過去に戻ることはできないことを自覚した上での批判に比べ、感傷的な近代批判の色合いがやや強くでているようにも思われる。〈子ども〉を対象としたことで、内山自身のノスタルジーが反映されてしまったのだろうか？ この点に留意しつつ読めば、〈子ども〉社会を考える上で、さまざまな示唆を与えてくれる著作といえよう。

斎藤次郎著
『「子ども」の消滅』

雲母書房、1998年

野垣義行（横浜国立大学）

1

斎藤次郎氏といえば、新鮮な切り口で子どもの世界、子ども文化を論じた『子どもたちの現在』（1975）を引っ提げて颯爽と登場し、以降子どもの側に立って斬新な子ども論を展開、最近ではやろうと思ってもなかなかできない、子どもと教室で机を並べるという得難い経験をまとめた『気分は小学生』（1997）の著者というのが筆者の認識である。

そして今度上梓されたのがこの『「子ども」の消滅』である。子どもが危ない、子どもが見えない、子どもはもういない、などといわれてきたが、本書は子どもの立場に立って発言してきた著者の、消滅しようとする「子ども」へのレクイエムなのか。

2

本書は、〈序〉「子ども」の消滅（13頁）、Ⅰ文化の変容（125頁）、Ⅱ子どもの森（55頁）、Ⅲ夢の器（77頁）、あとがき（2頁）、初出一覧（1頁）から構成されている。量的に本書の大部分を占めるⅠ、Ⅱ、Ⅲの部分は、1988年4月から94年5月にかけて発表された、子どもが置かれている状況や子どもの内面世界を明らかにしようとした論考で、著者がいう新しい子ども観を紡ぎ出す母体となったものである。

〈序〉を通して著者の主張に耳を傾けてみよう。「子どもを子どもとして成り立たせているのは、子ども自身ではなくておとなの側の子ども観」で、したがって『「子ども』という